

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 駒井睦子

本論文「アルフォンシーナ・ストルニの詩の道程——モデルニスモから前衛、アンティソネットの創造へ——The Path of Alfonsina Storni's Poetry: From Modernismo to Avant-garde and the Creation of Antisoneto」は、20世紀初めラテンアメリカで数少ない女性詩人の一人であったアルゼンチンのアルフォンシーナ・ストルニ(1892-1938)の創作の変遷を、同時代の文学状況に目を配りつつ丹念に辿り、生涯にわたって詩作と格闘したその軌跡を明らかにしたものである。ストルニはラテンアメリカにおけるフェミニズム詩の先駆者と見なされることがあるが、彼女の詩が描き出す世界は多様である。詩人としての方向性を模索する最初の詩集から出発し、女性の揺れ動く心情をさまざまな角度から詠む詩で名を高め、その後独自のやり方で前衛詩に接近、最後に幻想的な世界を描くアンティソネットに辿り着くまで、つねに自らの詩の刷新に挑みつづけた。その変化の背景には何があったのか。アルゼンチンの文学状況、とくに前衛詩の興隆との関係、ストルニにおける詩作品と散文作品との書き分け、同時期に創作していた詩人たちとの比較などを通して、従来の研究で見逃されていた点や曖昧にされていた点を的確に指摘し、この詩人の独創性を新たな観点から捉え直すことに成功した力作である。

本論文は、序章、5章の本文、結論から構成される。以下、その内容を要約する。

「序論」では、ストルニの略歴、研究史の概要、本論文で引用する詩の底本について説明される。第1章「最初の詩集における模索——白鳥・貧しい人々・「雌狼」」では、1916年に発表された初めての詩集『バラの木の不安』を扱う。いくつかの詩を除いてこれまでほとんど研究対象にされてこなかった詩集だが、本論文では詩人のその後の創作の方向性を知る上で重要なものであると位置づける。ルベン・ダリオの純粹芸術を目指したモデルニスモの影響が強い詩、その対極にある社会的弱者に目を向けた詩、女性の自立を強い口調でうたう詩をそれぞれ分析する。同じテーマを扱いながら語り口を工夫している様が観察できること、この詩集でもっともよく知られている詩「雌狼」に構造上の工夫があることなど、従来の研究で取り上げられなかった点に着目し、新たな読みを提示する。章の最後にフェミニズム的な視点で書かれたいくつかのコラムと短編一作を取り上げ、社会問題を意識した詩が二冊目以降の詩集からは書かれなくなるが、そ

の問題関心は、雑誌や新聞のコラムや短編小説で扱われるようになったことを明らかにする。

第2章「前期作品における語りの特徴と変化——同時代のラテンアメリカの女性詩人たちと比較して——」では、第二冊目から第四冊目の詩集を分析し、詩中で心情を吐露する女性の語り手「私」のあり方の多様性や語りの工夫を解明する。その際、同じように女性の語り手を詩のなかに登場させた、同時代のラテンアメリカの女性詩人三人の詩を比較の対象として取り上げ、ストルニの特徴を浮き彫りにする。最初にストルニより前に隣国ウルグアイで注目され、ラテンアメリカの女性詩人の先駆けとなったデルミラ・アグスティーニ（1886-1914）の恋愛詩とストルニの『甘美な苦痛』（1918）所収の同じタイトルをもつ詩を比較する。次に同じくウルグアイ出身のフアナ・デ・イバルブルー（1892-1979）の『ダイヤモンドの舌』（1919）とストルニの『甘美な苦痛』に収められたいくつかの詩を読み比べ、とくに恋愛の苦しみをうたう詩において両者が異なることを論ずる。三人目としてノーベル賞詩人であるチリのガブリエラ・ミストラル（1889-1957）の『荒廃』（1922）を扱う。ストルニの三冊目の詩集『逃れようもなく……』（1919）の恋愛詩の語り手と、ミストラルの数少ない恋愛詩に一貫して現れる悲観的で控えめな語り手を対照させる。またミストラルが得意とする子供をテーマにした詩に注目し、二人のあいだに子供を持っていない女の苦しみをうたう詩の応酬があったことを検討する。ストルニの男性優位主義社会への批判的な視点が、他の三人の詩人には見られないことも指摘する。章の最後に、これまで書いてきた主観的な詩の放棄を表明した四冊目の詩集『物憂さ』を扱い、新しく取り入れた要素は何か、その変化の傾向を探る。

第3章「中期作品とブエノスアイレスの前衛運動」は、1920年代のアルゼンチン文学における前衛運動ウルトラリスモとストルニの詩との関連を解明する。スペインで生まれたウルトラリスモがアルゼンチンに伝わった経緯、新しい芸術を目指す文芸総合誌『マルティン・フィエロ』上でのストルニの否定的な扱い、ボルヘスによるストルニ批判などを検討した上で、『マルティン・フィエロ』に寄稿した代表的な詩人たちの詩をいくつか分析、確認する。本章では五冊目の詩集『黄土』（1925）の詩を取り上げ、前衛文学の潮流に従ってはいないが、これまでとは違う傾向の詩が書かれるようになり、詩のなかの語り手「私」の立ち位置が大きく変わり、また語り手が感情を直接的に表現することがなくなったことを明らかにする。続いて六冊目の散文詩集『愛の詩集』（1926）の分析に移り、先行研究ではほとんど忘れられているこの小さな本がストルニの詩作において大きな転換点となった重要なものであることを突き止める。この詩集でこれまで書いてきた恋愛詩に区切りをつけ、新たな方向に向かうことになるのである。

第4章「後期作品と前衛文学運動の関係——『七つの井戸の世界』を中心に——」は、26年以降の創作活動について検討した上で、七作目を扱う。まずは芝居との関係で、27年に上演された戯曲『この世の主』の失敗が、ストルニの詩作に与えた影響をみる。戯曲の内容、劇評で受けた批判、ストルニの反論、一連の出来事がもたらした精神的打撃を詳述し、その直後に発表された詩の内容が暗く陰鬱で、外敵から攻撃される主体が現れるようになることを指摘する。一方、詩のなかで扱うテーマによって自由形式と伝統的な形式を使い分けていることにも注目する。また29年のヨーロッパへの船旅が詩人の創作に大きな刺激を与えたことを示す。以上のことを踏まえ、七冊目として刊行された『七つの井戸の世界』(1934)を四つのセクション毎に検討する。詩集冒頭の二編が主知主義的な詩作を宣言するものと解釈できること、海を扱うときの語り手の視点が変化したこと、海が生と死をあわせもつ場所として捉えられていること、幻想的世界が描かれるようになったこと、都会が非人間的な場所として扱われていること、恋愛の捉え方が大きく変化したことなどを指摘する。さらに30年代の社会的、文学的状况を概観し、31年に出版されたアンソロジー『アルゼンチン最新詩』に収められたいくつかの詩を分析して、ストルニとの共通点やウルトラリスモの影響などを明らかにする。またこの章では、従来ストルニの創作の後期は七作目が出版された34年からとするのが定説だったが、実際は27年に発表した詩から始まっていることを明らかにする。

第5章「アンティソネットの創造」は、死後出版された八冊目の詩集『デスマスクとクローバー』(1938)を扱う。ストルニの詩は七冊目から難解になっていくが、38年1月にモンテビデオで行われた朗読の会では、この最後の詩集に収められたいくつかの詩が書かれた背景を詩人自身が解説した。その説明を手がかりに詩の読解を試みる。さらにラ・プラタ川を詠んだ連作詩や復讐の女神が登場する詩、自伝的な詩などを分析する。終わりに、詩集には収められていないが彼女が入水自殺する数日前に書かれた詩を検討する。『デスマスクとクローバー』の詩はすべて無韻詩、つまり脚韻を踏まない11音節のソネットで書かれている。ストルニはこれをアンティソネットと名付けたが、この形式の詩は、彼女の詩作が辿った独自の進化の結果であることを解き明かす。

「結論」では、ストルニの創作の前期、中期、後期に出された詩集の特徴と変遷を振り返る。前期及び中期の詩では閉鎖的な空間のイメージが繰り返され、何かに閉じ込められた「私」がうたわれていたが、最後の詩集のアンティソネットにおいて、詩人はそうした世界観から脱却できたのではないかという可能性を示して本論文を締めくくる。

審査委員会では、同時代の三人の女性詩人と比較しつつ、ストルニの詩の特徴について論じた第2章がとくに評価された。またストルニの全作品を丹念に細やかに読み込み、

先行研究で取り上げられることがなかった詩にも光を当て、この詩人の変化の要因を様々な角度から探り、あぶり出したこと、従来の研究では曖昧にされてきた前衛運動との関係を解明したこと、創作の時代区分で後期が始まったとされる時期が1934年であるという定説は誤っていることを明快に示し得たこと、などに高い評価が与えられた。また、引用されている多数の詩の日本語訳が極めて正確であることは特筆に値する。

一方いくつかの問題点も指摘された。ブエノスアイレスの文壇の状況をより踏み込んで説明すると、当時の文壇のなかでのストルニの評価をより立体的に示せたのではないか。第5章で扱った八冊目の詩集は難解なものではあるが、ストルニが最後に到達した独自の詩世界であるので、分析対象とする作品の数を増やし、解釈をさらに充実させてほしかった。文章は丁寧に書かれ読みやすいが、詩の分析のための用語が若干なおざりに使われているところがある。また生涯を通して新たな詩作に挑戦しつづけたストルニの創作のなかで変わらないものとは何かを示してほしかったという意見も出た。

しかしこれらの指摘は、ストルニの作品を読み込みその変遷の要因を探り、従来の研究で曖昧にされていた、もしくは見逃されていた多くの重要な点を解明し、この詩人の独創性を新たな視点から捉え直すことに成功した本論文の価値を損なうものではない。以上から、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。